



「下に下に 大名行列が通る」

江戸時代、加古川は姫路藩の支配下にありました。主要道の西国街道は、現在の2号線より少し北側を通っていました。加古川には、加古川宿があって宿場町として賑わっていました。

加古川宿、現在の寺家町商店街の西端には、山脇家の陣屋があります。陣屋は、姫路藩加古川役所として、宝暦2年（1752）3月18日に建造され、参勤交代のために加古川宿を通行、宿泊する大名に対する応接などに使われました。建物内部は、中央部に上段の間が配され、応接の部分の部屋割が残っています。



大名行列に関する伝説として、加古川駅南東の龍泉寺近くに「胴切れの地藏」といわれている石棺仏があります。地元に残る伝説によると、この地藏を深く信仰していた

人が、大名行列の前を横切ったために、供侍ともざむらいに無礼打ちにあい、胴体を真っ二つに切られてしまいました。ところが、ふと気がつく自分の胴体はなんともなく、地藏の胴が真っ二つになっていました。以来、地藏が自分の身代わりになってくれたということで、一層深く信仰するようになったといわれています。

何気なく通っている道にも歴史の息吹が感じられるのが、加古川の魅力です。

ぶらり加古川第46号

平成29年2月